九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# Rewriting Southern History : Ernest J. Gaines' The Autobiography of Miss Jane Pittman (In Honour of Professor Fumio Miyahara On the Occasion of His Retirement)

Kotani Koji
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/1354651

出版情報：英語英文学論叢. 47, pp.77-91, 1997-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

# 南部史を書き直す

## ——アーネスト・J・ゲインズ『ミス・ジェイン・ピットマンの自伝』——

小谷耕二

Ernest J. Gaines の *The Autobiography of Miss Jane Pittman*（以下 *AMJP* と略記）は生れ故郷のルイジアナの黒人たちの世界を，南北戦争から公民権運動の時代に至るまで100年間の歴史的展望 のもとに描きだそうとした作品である。齢110才にもなる黒人女性 ミス・ジェインの自伝的回想という形式をとることで，ゲインズはひとりの魅力あふれる女性像を造型すると同時に，南部の100年間 の歴史を作中に導入している。この作品はフィクションなのだが，当初ミス・ジェインを実在の人物と思った批評家も何人かいるほどで，『ニューズウィーク』誌からは彼女の写真を求める手紙も届いたそうである。[1] 現実の歴史上の出来事と虚構のミス・ジェイン 像がいかにうまく絡み合っているかを示すエピソードである。もちろん題名が招いた誤解であろうが，それにしてもなぜゲインズは小説に「自伝」というタイトルをつけたのだろうか。小論では，史実とフィクションの絡めかたといった点を考慮しながら，ゲインズがどのような歴史的ヴィジョンを描きだしているのかという問題を考察したい。

### I

四部構成のこの小説には序文がついており，そこでゲインズは一人称の「私」という形で，架空の歴史の教師を登場させ，この作品の成立の経緯を説明している。この歴史の教師は学校で使っている教科書には載っていない

---

＊本稿は，日本英文学会第47回九州支部大会（1994年10月，活水女子大学）において，「アーネスト・J・ゲインズ『ミス・ジェイン・ピットマンの自伝』——その歴史的ヴィジョンをめぐって——」と題して口頭発表した原稿を加筆修正したものである。

1）Ernest J. Gaines, "Miss Jane and I," *Callaloo* 1, No. 3 (May 1978), 23, quoted in Valerie Melissa Babb, *Ernest Gaines* (Boston : Twayne Publishers, 1991), p.78.

ような歴史を生徒たちに教えたいという希望をもっており，ミス・ジェインを説得して昔の話をしてもらい，それをテープに録音する。そしてそれを話の実質を損なわない程度に編集したものが，作品の本体になっているというわけである。ただミス・ジェインだけが話をしたわけではない。8か月から9か月間にわたるインタヴューの間，ミス・ジェインの記憶が途絶えたり，また気分がすぐれなかったりといったときには，ほかの人々が話を進めたこともあったということになっている。したがって，ミス・ジェインの物語は同時に彼ら，ミス・ジェインのまわりの黒人たちの物語でもあったと，この歴史の教師は述べている。[2)]

この作品の成立の経緯から，ゲインズの歴史的ヴィジョンに関連するポイントをとりあえずふたつ指摘することができるだろう。ひとつは教科書には載っていないような歴史を教えたいという，この歴史の教師の言葉である。これは教科書という形で制度化されていない，つまり制度の支配者のイデオロギーに組み込まれていない，別の形の歴史を教えたいということだ。したがって，ミス・ジェインのこの自伝はオフィシャルな歴史認識のなかに埋もれて，忘れ去られた声を記録しておこうとする試みでもある。もうひとつは，ミス・ジェインの話がテープ・レコーダーに録音されたという設定である。話の編集にあたって，この歴史の教師はミス・ジェインの言語，その言葉遣いや話のリズムを壊さないように努めたと述べている。だからこれはオーラル・ヒストリーなのだ。つまり口承文化，語り伝える文化という黒人の伝統に深く根ざしているわけである。このふたつの点を考えあわせれば，序文にはゲインズの基本的な姿勢が明らかに見て取れるといってよいだろう。こうした物言いはすでにクリシェになってしまった観があるが，昨今の文化多元主義に呼応するように，彼はみずからの文化的伝統にひとまず立ち戻って，従来の白人中心の歴史認識を見直そうとしているのだ。

歴史は一種のフィクションである。歴史上の出来事をたんなる事実の羅列としてではなく，なんらかの展望のもとに把握しようとする際には，必ずそれを見る者のヴィジョンがそこに投射される。南部史の場合も例外ではない。歴史学者 Charles Reagan Wilson によれば，南部の伝統は南北戦争後に構築されたものである。彼は，1869年の南部歴史協会の設立に始まって，南部史

2) Ernest J. Gaines, *The Autobiography of Miss Jane Pittman* (1971; New York : Bantam Books, 1972), v-viii. 以下，作品からの引用はこの版に拠り，頁数もしくは該当箇所の巻数とセクションの表題を本文中に記す。

の資料の収集と保存，元南軍将校の回想録の出版による英雄崇拝と歴史のフィクション化，南部独自の教科書発行，Lee 将軍の誕生日の祭日化，南軍兵士像の建立等々，さまざまの動きがいかに南部の正統史観の構築に向けて収斂していったかを跡付けている。[3]「ほかならぬ死滅の瞬間に南部連合国は不滅の領域に参入したのだ」[4] という逆説をそこに明瞭に見てとることができよう。南部史とは，北部とその価値観にもとづいたアメリカという国家のオールタナティヴとしての南部の歴史の正典化だったのだ。

この南部史の正典化を支えていたのが白人優越のイデオロギーであったことはいうまでもない。そして南部の正統史観のなかで，黒人の存在は歴史から抹消されるか，あるいは Uncle Remus 像のようなステレオタイプとしてそこに組み込まれていくかのどちらかであった。公民権運動の昂揚を経た後に出版された *AMJP* が，黒人の立場から南部史を見直そうというモチーフに支えられていたのは至極当然であるといえよう。[5]

## II

この作品にはピカレスク小説のパターンが見られるという指摘がある。つまり自伝的な語りによるエピソードのゆるやかな連なりという枠組みのなかで，孤児の主人公が旅に出てはさまざまな階層の人物や事件に出会い，機知によって苦境を脱するさまが風刺的に描かれるというのである。[6] このパターンは旅の空間性に依拠していると思えるが，*AMJP* の場合はむしろ時間系

3）Charles Reagan Wilson, "The Invention of Southern Tradition : The Writing and Ritualization of Southern History, 1880-1940," *Rewriting the South : History and Fiction,* eds. Lothar Hönnighausen and Valeria Gennaro Lerda (Tübingen : Francke, 1993), pp.3-21.

4）Robert Penn Warren, "The Legacy of the Civil War : Meditations on the Centennial," *A Robert Penn Warren Reader,* ed. Albert Erskine (New York : Vintage Books, 1987), pp.274-275.

5）歴史学者 Thomas C. Holt は，1970年代，1980年代の黒人史研究 では，歴史を黒人が経験したままの形で理解しようとする傾向が主流になったことを指摘し，次のように続けている。"In that history blacks would no longer be relegated to nonspeaking roles, the passive victims of white hostility or beneficiaries of white benevolence." Thomas C. Holt, "African-American History," *The New American History,* ed. Eric Foner (Philadelphia : Temple UP, 1990), p.212.

6）J. Lee Greene, "The Pain and the Beauty : The South, the Black Writer, and

列に比重があり，ミス・ジェインと歴史の変化との遭遇がピカレスク風に語られるといった方がよいだろう。歴史の教科書にしたいという，序文での教師の言葉どおり，黒人たちの日常の生活ぶりばかりではなく，歴史の節目となるような出来事や事象をできるだけ盛り込もうとする意図が，明瞭に存在しているのである。南北戦争や再建時代の変革，公民権運動といった社会の大変化はもとより，戦後の解放奴隷管理局("Freedom Beero")の活動，共和党と民主党の対立と政治の混迷，KKKをはじめとする秘密結社によるリンチの横行，黒人たちのカンザス移住熱，米西戦争，1912年と1927年の大洪水，1954年の最高裁Brown判決，1963年のワシントン大行進等への言及が見られる。また歴史上の人物では，Frederick Douglass, Booker T. Washington, Huey Long, Martin Luther King, Jr.などのほか，ヴードゥー教の呪術師Marie LeveauやJackie RobinsonおよびJoe Louisといったスポーツ選手の活動が言及されている。しかもこうした事件や世相や人物の活動は，ポピュラーな歴史小説にありがちなようにたんなる装飾的な舞台背景となっているのではなくて，ミス・ジェインの生涯と緊密に絡み合っているのである。

南部史の見直しというモチーフは，こうした現実の歴史上の出来事や事象に対するミス・ジェインの評価に端的にあらわれている。[7] 一例として，ミス・ジェインの眼に再建時代がどう映っていたかを見ておこう。"Reconstruction"と題された第2部の冒頭のセクションには，"A Flicker of Light; and Again Darkness"という表題がついている。再建時代は南部の白人にとって暗黒の時代であった。この時期南部には連邦政府軍が駐留し，その軍事力の傘の下で黒人に市民権や参政権を与えることをはじめとした再建政策が推し進められていった。それに伴って黒人の政治家も登場し，加えて，北部から

---

Conventions of the Picaresque," *The American South : Portrait of a Culture*, ed. Louis D. Rubin, Jr. (Baton Rouge : Louisiana State UP, 1980), pp.264-288.

7) ヴァレリー・メリッサ・バブは，ゲインズが黒人女性の〈声〉を通して歴史を再構築したことを "a striking act of fictional revision"として高く評価している。南部史の見直しという点で，本論はバブの論考と基本的に立場は同じである。忘れられた歴史を掘り起こした一例として，ゲインズがミス・ジェインの夫Joe Pittmanの造型を通して〈黒人カウボーイ〉像をよみがえらせたことを，バブは指摘している。バブによれば，西部では，人間よりも仕事の数が多く，仕事の力量が肌の色よりも重要だったので，人種的偏見はそれほどひどくはなく，黒人のカウボーイが実在した。ところが，カウボーイが神話や伝説となっていくときに，黒人カウボーイの存在は忘れられていったのであった。Babb, *Ernest Gaines*, pp.77, 86-87を参照。

やってきたカーペットバガーや南部のスキャラワグが入り乱れて，政治の場に対立と混乱を引き起こした。こうした状況が敗者たる南部白人にとって我慢のならぬものであったことはみやすい道理である。事実，すでに触れたとおり，南部の正統史観を形成しようとする動きが表面化してくるのはこの時期であった。

しかし，ミス・ジェインにとってはそれは希望の光がともった時代であった。その希望を支えていたのは何よりもまず教育である。ゲインズが黒人の歴史において教育がいかに重要であると考えているかは，その作品世界で教師像が占めている重要な位置から明らかである。[8] ミス・ジェインの回想においても黒人居住区にはじめて学校ができたときのことが，ほほえましく語られている。子供たちが昼間通うのはもちろんのこと，畑仕事を終えた大人たちも夜そこで学んだのだが，週に一度は特別の教師の日というものがあった。教師を家に招いて，食事をするのである。その日は，貧しいながらもだれもがほかの家よりもよいもてなしをしようとした。そこで，農園主の家の召使から借りた上等のスプーンとフォークが，どの家でも食卓に置かれる仕儀と相成ったのである(pp.65-66)。「黒人のために学校が設立された」といったたぐいの教科書のたんなる記述からは，おそらく脱け落ちてしまうような民衆の日常生活の一齣が，ここではユーモラスに掬いとられている。そして，晴れてそうした学びの場をもてるようになった喜びと希望が素直に伝わってくる。

この学校の回想に続いて，共和党支持派と民主党支持派双方の黒人政治家が論争する政治集会の場面が出てくる。共和党支持派は，共和党こそが黒人を解放し，また解放奴隷管理局を設立して困窮している黒人たちを援助しているのだと主張するのに対し，民主党支持派は，ヤンキー達を追い出して，自分たちの手に政治を取り戻そうと主張する。民主党の黒人は一目ですぐわかる，口が白くて，尻尾がついてるからな，と共和党支持派がからかうと，それに対して，脳味噌をもたない共和党員になるくらいなら，尻尾のついた民主党員になったほうがまだましだと，民主党支持派は切り返すといった具合だ。そして議論は白熱し，集会は最後には殴りあいの大混乱に陥るのだが，

8）たとえば，1993年に刊行され，National Book Critics Circle Award を受賞した *A Lesson Before Dying* では，強盗殺人事件に巻き込まれ，無実の罪で死刑宣告を受けた黒人青年に精神的救済をもたらす役目をになった教師 Grant Wiggins の苦悩と努力が主題となっている。

後になってそれがKKK団などの秘密結社に仕組まれたものだったということがわかるのである(pp.66-68)。ここでは，ミス・ジェインはどちらかの党派に肩入れしているとは見えず，この政情混乱の描写には戯画的な風刺の色彩が色濃く漂っている。しかし，この場面に感受される活気あふれる雰囲気は祝祭性を帯びており，南北戦争後の価値観の転倒に深く根ざすものだといってよい。いささか揶揄的な調子はあるにしても，そもそも黒人政治家の登場という現象自体が戦前には夢想すらできなかったことであり，この祝祭性は黒人たちが感じ取っていた，時代の希望の反映なのだ。

やがて南部と北部の政治的妥協の産物として，連邦軍は南部から撤退し，1877年再建時代は終結する。同時にミス・ジェインたちの眼前から希望の灯が消えることになる。いまや南部の白人による白人のための再建が始まり，一方北部は南部を投資の場としてしか見なくなったのである。この変化はミス・ジェインが働いている農園の主人が，スキャラワグだったBoneからColonel Dyeに変わることに反映している。ボーンは解放奴隷を農園に引き取って仕事を与えていたのだが，そのボーンが数日前まで立っていた同じ屋敷の同じヴェランダから，ダイ大佐はこう宣言する。これからは黒人の兵士も黒人の政治家もいらない。給料は据え置きで男15ドル，女10ドル。毎年，年の終わりに支払う。食料と服は店から持っていけ。それで気に入らなければ，とっとと出ていけ(p.70)。食料と服の代金は給料から差し引かれるわけで，これは悪名高いシェア・クロッピング制度の宣言である。そして再建期に設立された学校も閉鎖されてしまう。

これを機に南部を去る黒人が激増するのだが，ミス・ジェインは農園にとどまることを選ぶ。それは北部がいまや当てにならぬことを知ったからであり，ほかに今よりもっと暮らしやすい所がさしあたりなかったからである。黒人に理解と共感を示してくれる北部という幻想は砕かれ，人種の平等よりも自らの利益のために南部の経済的支配をもくろむ北部という現実に，ミス・ジェインは眼を開かれるのである。ここでは，再建時代に法的地位の改善，学校設立などの面で希望の光が灯ったかに見えたものの，結局黒人は南部と北部の政治的利害関係のなかで翻弄されただけで，実質的な変化は南北戦争後もなかったという歴史観が如実に表れている。黒人にとっては，まさしく，「奴隷制度に逆戻り("It was slavery again, all right." [p.70])」なのである。

## III

奴隷解放宣言後，少女のミス・ジェインらを率いて北部をめざし，白人のパトロール隊との戦いのさなかに壮絶な死をとげるBig Lauraから，公民権運動に身を投じるJimmy Aaronにいたるまで，この作品には何人かの指導者が登場する。これらの指導者の造型をとおして，ゲインズは，公民権運動の激動のなかで黒人が進むべき道の指針を模索している。この100年間の黒人の歴史のなかで抑圧と被支配にたちむかった人物たちの活動を掘り起こし，その埋もれた声を甦らせることによって，黒人がどこに拠り所を求め，どのようにして道を切り開いていけばよいのか，そのスタンスを見定めようとしているのである。その意味で，ゲインズにとって南部史を見直すということは，指導者のありかたを歴史的に考えることでもあった。

このリーダーシップの問題を扱うにあたって，ゲインズは歴史上の実在の人物に対する評価を登場人物の性格造型や物語の展開に組み込むという手法を用いている。過去の代表的な黒人の指導者として，ブッカー・T・ワシントンとフレデリック・ダグラスの名がこの作品には出てくる。黒人の地位向上のため何をなすべきかについて，この二人の指導者の考え方には違いがあった。黒人版Benjamin Franklinともいうべきワシントンは，実用的な知識を重んじ，職業上の技能を身につけることの必要性を説いた。黒人が経済面で立派に成功してみせることで，自分たちが市民権に値することを白人に証明しなければならないと考えたのである。一方，ダグラスは独立宣言の理想を信奉し，合衆国憲法に保障された人権が白人と黒人の両者に平等に適用されることを求めた。したがって，黒人が社会的に隷属している現状を，ワシントンが黒人の自己鍛練のための一種の学校とみなしたのに対し，ダグラスはそれをいかなる意味においても容認できなかった。

図式化すれば，ワシントンの方が現実主義路線，ダグラスは理想主義路線といえようが，ゲインズはこの両者を基本的な指導理念の対立と見なしているように思える。そして，作中の重要な指導者のひとりNedに二者択一の選択を行なわせている。ビッグ・ローラの息子ネッドは母の死後ミス・ジェインを母親代わりに成長する。再建時代が終結すると，彼は黒人の地位向上のための社会改革をめざす組織に入り，黒人の北部脱出を援助する活動に従事するが，弾圧を受けカンザスに逃亡する。ちなみにこれは黒人のカンザス移住熱が高まった1870年代終わりのことで，史実に即した設定である。その後

米西戦争に従軍したあと帰郷し，学校を建設し，教育活動に従事する。そして最後には，白人の支配層に雇われたAlbert Cluveauに暗殺されるのだが，ネッドはダグラスの思想を信奉し，ワシントンを批判している。ネッドによれば，職を身につけるという点ではワシントンには賛成だが，白人が社会の規範を作り牛耳っている状態ではただ手に仕事をもつだけでは事態はいっこうに改善されない。それはただ自己解放のほんの一部にすぎず，全面的な解放ではない。"nigger"としての在りかたを受け入れることでしかない。そうではなくて"black American"であるために，戦わねばならないのだ，そう彼は主張するのである(Bk.II, "The Sermon at the River")。

ここでネッドは，ダグラスが白人と黒人の間の対等な関係を求めているのに対し，ワシントンの考え方が，究極的に白人と黒人の優劣関係を温存することにつながることを，明確に認識している。彼はフレデリック・ダグラスにちなんで，みずからネッド・ダグラスと名乗り，生徒たちからはプロフェッサー・ダグラスと呼ばれている。そして満足した奴隷であるより，自分は人間だといって死んだほうがましじゃないかと，生徒たちに問いかけている。抑圧と被支配の構造の片隅にささやかな安住の場を得て満足するのではなく，その構造そのものを覆すべく戦わねばならない。学ぶことこそがその武器だと，教師ネッドは述べるのである(Bk.II, "The Sermon at the River")。幼少の頃ミス・ジェインと旅を続けていたとき，ネッドはビッグ・ローラの形見の品として火打ち石を肌身離さず持ち歩いていた。そして無口な彼が初めて口を開いたときに発した言葉は,「火」という言葉であった(Bk.II, "Shelter for a Night")。この言葉にギリシャ神話のプロメテウスのイメージが重ねてあることは間違いないだろう。彼は黒人の怒りの「火」と，教育による知識の「火」を生徒たちにもたらそうとしたのだ。

このように実在の人物の活動や思想に対する批評を作品内に導入し，歴史上の人物と作中人物との間に一種の対話を行なわせることによって，ゲインズは歴史と物語を緊密に結びつけ，架空のミス・ジェインの物語に南部の黒人の歴史を集約させようとしているのである。

## IV

ダグラスの思想を信奉するネッドはたんに読み書きと算数を教える教師ではなく，社会と自己の変革を求める人生の教師／指導者であったといってよ

い。だが，教師／指導者像としてもっとも生彩を放つことになるのは，ほかならぬミス・ジェインであろう。この魅力あふれる一種神話的な人物像こそは，白人中心の歴史を相手にそれに十分に拮抗しうる力を備えた文学的創造である。黒人の眼から南部史を書き直すというゲインズのモチーフも，その十分な形象化はひとえにミス・ジェイン像の造型に依存しているのである。

彼女は独立心旺盛で，強い意志と自我をもった女性であり，黒人としての自律性をもった人物として描かれている。この性格造型は少女時代からすでに顕著であり，奴隷のときの名前にかわってジェインという新しい名前を北軍の兵士につけてもらうと，新しい自分の象徴としてのその名をあくまでも固持する。ネッドとの旅を続けている間，めざしているオハイオが途方もなく遠いことをある老人に教えられたときも，自分の愚かさに挫けそうになりながらも，オハイオをめざす決意を捨てようとはしない。ボーンの農園で働き始めたときには，まだ11才か12才の子供だったにもかかわらず，一人前の女と同じ賃金を要求し，賃金分の畑仕事をやりぬく，といった具合である。また，白人はもとより，黒人たちも誰もが彼女の生意気さに言及しているといってよいくらいで，その自分の主張を曲げぬ，歯に衣着せぬ言葉遣いは終始一貫している。

ミス・ジェインのもうひとつの特質は母性的な包容力である。彼女の母性の深さを暗示する印象的な場面がある。殺されたビッグ・ローラの死体をまのあたりにする場面である。

> Then I saw Big Laura. She was laying on the ground with her baby still clutched in her arms. I made Ned stay back while I went closer. Even before I knelt down I saw that her and the baby was both dead.
>
> *I took the baby out her arms. I had to pull hard to get her free. I knowed I coludn't bury Big Laura—I didn't have a thing to dig with—but maybe I could bury her child. But when I looked back at Big Laura and saw how empty her arms was, I just laid the little baby right back down.* I didn't cry, I couldn't cry. I had seen so much beating and suffering; I had heard about so much cruelty in those 'leven or twelve years of my life I hardly knowed how to cry. I went back to Ned and asked him if he wanted to go to Ohio with me. He nodded.
>
> (Bk. I, "Massacre," p.23；イタリックは筆者)

赤ん坊を取り上げたとき，ビッグ・ローラの腕が空っぽに見えたと感じるのは，身体の奥深くでの母性の発現と考えてよいだろう。奴隷時代に主人から

鞭打たれたことが原因で，ミス・ジェインはこどもを産めない身体になっている。しかし象徴的な次元では，彼女はこのとき，ビッグ・ローラに代わってネッドの母親となるのだと思われる。そしてその後さまざまの苦難に直面したときに彼女が示す思考や感情は，母性に裏打ちされたものなのである。

この母性に根ざした態度は，世代間の対立や男女間の葛藤のなかに明瞭な形をとって現われてくる。ミス・ジェインは，若いネッドが南部を離れカンザスに向かおうとするとき，自分が正しいと思うことをすればよいと言って，それを認めてやっている。しかし，いっしょに来てほしいというネッドの願いに対しては，別れの悲しみを抑えて，それを拒んでいる。ひとは動き続けるものではないと考えて，いまの自分の場所にとどまることを選ぶのである(Bk.II, "Ned Leaves Home")。また，ネッドが帰郷し，その教育活動のせいで彼の身に危険がおよんでくるのを感じると，何よりもまずネッドの身の安全をはかろうとする。そして彼がカンザスに帰らざるを得ないように仕向けるために，ネッドの妻にこどもを連れてカンザスに戻るように勧める。夫の Joe Pittman が不吉な黒馬の調教を始めたときにも，ミス・ジェインは彼の身の安全を第一に考えている。ジョウにとって，荒馬の調教は経済的自立だけではなく，ひとりの独立した男としての生き方を証だてる行為なのであるが，彼女は黒馬に乗らぬように懇願したり，黒馬を囲いから逃がそうとしたりするのである。こうした態度は，Samson 農園の農園主の嫡男 Tee Bob の悲恋の場合にも見られる。ティー・ボブは，農園内の学校の教師をしているクリオールの Mary Agnes LeFabre に恋慕の情を抱く。しかし人種の違いの壁に阻まれ，最後には自殺してしまう。こうした悲劇的結末が出来するのを避けるために，ミス・ジェインはメアリー・アグネスをサムソン農園から離れさせるのが一番だと，ティー・ボブの母親に進言していたのである。

## V

ミス・ジェインのこうした一見消極的な姿勢に，逆にゲインズの模索する指導者像の反映を見てとることができるように思われる。たしかにダグラス流の理想主義路線から見れば，ミス・ジェインの姿勢は変革を回避し，現状を甘んじて受け入れる態度でしかないように感じられるだろう。しかしここには人間と土地との結びつきという別の要因が存在しているのであり，そこから問題を捉え直さねばならないのだ。

そもそもミス・ジェインは少女の頃からのあの生意気なまでの強い自我を失っているわけではない。ネッドと別れてダイ大佐の農園にとどまることを選ぶとき，彼女は自分が属している場所と強く結びついていることを自覚している。かといって，犬みたいに飼い主が床に放り投げるパン屑を這いつくばって食べるつもりはないと，明言しているのである(“I won't eat crums, Ned, and I won't eat off the floor,” I said. [p.76])。また，サムソン農園に移ってからのミス・ジェインは，最初のうちは農園主の家の料理人として，サムソン屋敷の向かいに住んでいるが，ティー・ボブが自殺した後は，引きとめられたにもかかわらず，黒人居住区の奥の，水道も電気もない家にみずから移り住んでいる。文字通り黒人の共同体の中枢に入っていくのである。

ゲインズ自身長年カリフォルニアで暮らしながらも，断ちがたい愛着を生れ故郷のルイジアナに感じていることは，インタヴューでも折りに触れ述べており，また公刊された作品がルイジアナを舞台にしていることからも明らかだが，彼には人間は土地と結びついた存在だという感じ方が強くあるとみてよい。たとえば，ネッドは死を予感した最後の説教のなかで，人間は土地の小さな一部だ，倒れた木が土に帰っていくように，人間も死んだら土に帰っていくと述べている(“Man is just a little bitty part of this earth. When he die he go back in the earth *just like a tree* go back in the earth when it fall,. . .” [pp.107-108; イタリックは筆者])。ここに用いられた比喩は，ゲインズの初期の短篇，“Just Like a Tree”を思い起させる。この短篇は，自分の孫が公民権運動に関与したために，住み慣れた農園を立退かねばならなくなったAunt Feという年老いた黒人女性と，同じ農園で彼女と長い間苦楽を共にしてきた人々との別れを描いたものである。そのなかで作中人物のひとりが，立ち去らねばならないアーント・フェイの姿をトラクターで木の根が掘り起こされるイメージで捉えている。地面に深く根を張った木に鎖を巻きつけ，トラクターでむりやり引き抜いても，それで得られるものは地面にできた大きな穴と，葉が茂っていた空間にぽっかりあいた大きな穴だけであり，しかも木の根を先端まで完全に引き抜くことはできないというのである。[9]「まるで木のように」という表現は，黒人霊歌に由来しているのだが，この土地に深々と根を張った木こそは，土地と結びついた人間の根源的なイメージだといってよいだろう。

9) Ernest Gaines, “Just Like a Tree,” *Bloodline* (New York : W.W. Norton & Company, 1976), pp.235-237.

ミス・ジェインは，自分の住む土地にとどまり，自分の属する共同体に深々と根をおろしていくことで，この根源的なイメージを体現する存在となっている。しかもその土地にはこれまでそこで生き死にした無数の人々の血と汗と歴史が浸み透っているのである。暗殺されたときに，ネッドが流した路上の血の痕は，その後何年もの間雨が降っても，道に砂利を敷いても，消えることはなかったという(Bk.II, "Assassination")。母性に根ざしたミス・ジェインの姿勢がいかに消極的なものに見えようとも，そこには地中に浸み透ったネッドの思想が樹液のように吸い上げられているのだ。ここにゲインズの求める指導者像を見てもよいであろう。すでに見たとおり，ブッカー・T・ワシントンとフレデリック・ダグラスの思想をネッドに比較させることによって，ゲインズが順応と服従ではなく，黒人としての，また一個のアメリカ人としての自覚を重要だとみなしていることは明らかである。しかし同時に，その自覚が真に社会の変革を促す力をもつには，自分の属している共同体との結びつきを失ってはならないと，彼は考えているのだ。この問題はゲインズにあってはしばしば世代間の対立という形をとって現われてくる。一個の人間としての自覚にめざめた若者は，しばしば性急な反抗に走っていく。一方，もっと古い世代の黒人たちは，たとえそれが抑圧的なものであっても，これまでどおりの社会のなかでこれまでどおりの順応と服従の生き方を続けることを望む。若者の性急な反抗はしばしば自暴自棄ともいえる不毛な死を引き起すだけに終わり，また順応と服従はさらなる順応と服従を招くだけのことになりかねない。この対立を解消する，あるいは発展的に統一するものとして，ゲインズは土地／共同体に根をおろした指導者像を持ち出してくるのだ。

ゲインズの公民権運動の捉え方も，この人間と土地／共同体との結びつきを抜きにしては語ることはできない。幼少の頃から"the One"として，人々を導くべく運命づけられ，長じて期待どおり公 民権運動に関わるようになったジミー・エアロンは，故郷の農園にも改革の波を起こそうとする。しかし人々が恐れ逡巡するために，なかなかうまく運動を組織することができずにいる。そんなジミーに対し，ミス・ジェインは人々に語りかけろ，わかってもらえなくても語りかけ続けろと，忠告する("Talk with them, Jimmy. Talk and talk and talk. But don't be mad if they don't listen." [p.229])。変化を生み出すには十分な時間が必要であって，指導 者が人々を動かすのではなくて，人々と時間とが指導者をもたらすのだと，ミス・ジェインは諭すのであ

る("People and time bring forth leaders," I said. "Leaders don't bring forth people. The people and the time brought King; King didn't bring the people." [p.228])。こうした見方は，公民権運動とリーダーシップの問題を日常的な生活者，言い換えれば，日々のさまつな営みに一喜一憂する普通の民衆の視点から捉え返そうとする試みだといえるだろう。土地／共同体から遊離したところに変革は成立し得ない。名もない無数の人々が日々感じている小さな希望や喜びや恐れや悲しみをみずからのうちに吸い上げることができてはじめて，指導者は真に変革をもたらすことが可能になるのだ。そうゲインズは考えていると見てよいであろう。この作品は，ジミーの訃報を受けたミス・ジェイン自身がデモ参加のために立ち上がり，農園のほかの黒人たちが後に続くというところで終わる。この結末でミス・ジェインは，土地／共同体に深く根をおろした指導者としての相貌を顕わにするのである。

## VI

あるインタヴューで，ゲインズはミス・ジェイン像に彼の大伯母の面影をダブらせていた旨を述べている。この大伯母は足が悪く，生涯の間一度も立って歩くことはなかったというのだが，彼女の困難に耐え苦境を切り開く勇気を，ゲインズは描こうとしたのであった。[10] これはこの作品のパーソナルなモチーフである。ミス・ジェインの生涯を100年間におよぶルイジアナの歴史に絡めて描いたことについては，自分を知るということがその動機だったようだ。この作品が出たのは公民権運動後の1971年のことである。激動のあとの，みずからを含めた黒人の位置を歴史的に確認するというモチーフがあったわけだ。

ミス・ジェインという架空の人物についての小説が「自伝」と銘打たれたのは，ひとつにはそれが奴隷体験記の体裁をとっていることに関係していよう。1930年代の後半から1940年代にかけて，WPA（事業企画庁）の不況による失業対策の一環として，元奴隷にインタヴューを行い，その記録を残しておくという事業が実施された。ここには歴史の教科書には出てこないような，無名の民衆の忘れられた声が記録されているわけである。ゲインズはこうしたインタヴューの記録に眼を通し，そこに語られている内容だけではなく，

10) Ruth Laney, "A Conversation with Ernest Gaines," *The Southern Review* 10 (January 1974), 2.

元奴隷の言葉遣いにも触れていた。[11] 歴史の教師がミス・ジェインにインタヴューを行い，その記録を編集したものがこの作品だという設定は，まさしくこのWPAのオーラル・ヒストリー保存の事業に合致している。その意味で，これはミス・ジェインの奴隷体験記としての自伝的性格をもつ。

「自伝」という表題のもついまひとつの意味は，ゲインズの作家としての野心に関わるものであるように思える。人が自伝を書く動機はさまざまであろうが，自伝の機能とは自らの来し方を顧みることによって，その意味を確認し，現在もしくは将来へのなんらかの展望を作りだすということであろう。その際，いかに自らの過去を客観的に再現しているように見えようとも，原理的には，自伝において表現されるものは事実そのままではありえない。過去の事実を取捨選択し，あるパースペクティヴにもとづいた意味付けを施すとき，そこにたちあらわれてくる表象は必然的に構築されたものである。その意味において，それは一種のフィクションにほかならない。

ブッカー・T・ワシントンもフレデリック・ダグラスも自伝を書いている。この二人の自伝は社会的に功成り名を遂げたいわば公的人物としての自伝であり，その抜きんでた偉業を通して，後世代の黒人たちに希望と目標を提供する意図があったと思われる。そしてそこに描きだされたものは，その意図に即して構築された自己像であったはずだ。ゲインズがミス・ジェインという架空の人物の物語に「自伝」という名をかぶせたときに，この二人の自伝が念頭にあったことはおそらく間違いないであろう。ただゲインズは，もっと平凡な無名の人々の日常的な視点から自分たちの過去を確認し，そこから現在と将来への展望を模索しようとしたのであった。そこでミス・ジェインの生涯に南部の黒人たちの歴史を集約する工夫を施したのである。その工夫のうちもっとも顕著なものが，歴史の教師がミス・ジェインにインタヴューを行い，それを編集したという設定であった。[12] そもそもミス・ジェインが自伝を＜書く＞ことができるはずはないのであって，この教師が介在することではじめて彼女の「自伝」は成立し得たのである。だが同時に，この工夫は

---

11) あるインタヴューで，ゲインズはWPAのインタヴューの記録 *Lay My Burden Down* を読み，元奴隷の話し方のリズムや，彼らが自分自身についてどう語っているかを学んだ旨，述べている。Charles H. Rowell, "Ernest J. Gaines : A Checklist, 1964-1978," *Callaloo* 1, No. 3 (May 1978), 46-47, quoted in Babb, *Ernest Gaines,* pp.78-79を参照。

12) この歴史の教師の編集者としての機能を，自伝というジャンルの特性とも絡めなが

自伝というジャンルの本質的なフィクション性を顕在化する装置でもあった。ミス・ジェインの「自伝」を通して浮かびあがってくるのは，この教師，ひいてはその背後にいる作者ゲインズの歴史的な展望なのである。したがって架空のミス・ジェイン像を彫りあげることは，その歴史的展望にもとづいて，黒人民衆の視点から南部史を書き直すことにほかならなかった。そして，自伝というものが事実や史実に依拠することで信憑性／リアリティを獲得するように見えて，実は本質的にフィクション性を孕んでいるのに対して，ゲインズはそれをいわば逆手にとって，フィクションによって史実や事実のリアリティを生み出し，ミス・ジェインの「自伝」に信憑性を与えたのである。ミス・ジェインが実在の人物に間違えられたのは，作家としての野心の勝利であった。

---

ら多面的に考察した論文として，次のものが参考になる。Mary Ellen Doyle, "*The Autobiography of Miss Jane Pittman* as a Fictional Edited Autobiography," *Critical Reflections on the Fiction of Ernest J. Gaines*, ed. David C. Estes (Athens : Univ. of Georgia Press, 1994), pp.89-106.